

**注意：本研究の報道解禁日時は 10 月 19 日（土）午前 0 時 新聞は 19 日朝刊から**

平成 25 年 10 月 18 日

PRESS  
RELEASE国立大学法人  
徳島大学

東京方言話者と東北地方南部方言話者の言語処理の違いを発見

- 脳は育った地域方言によって音声を処理する -

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部佐藤裕准教授は、日本語における単語のピッチアクセント<sup>1)</sup>を処理する際の脳活動における左右の半球の反応差が、東京方言話者と東北地方南部方言話者間で異なることを突き止めました。

これは、理化学研究所の山根直人研究員、馬塚れい子チームリーダーらと、名古屋大学の宇都木昭准教授、東北大学の小泉政利准教授らの共同研究グループによる成果です。

(報道概要)

**本研究成果のポイント**

- 同じ日本人でも育った方言環境により脳反応が異なる
- 言語処理における左優位反応の形成には幼少期の方言経験が関与している可能性
- 脳と言語発達の知見を深めることで、教育や医療発達分野への貢献期待

人間の脳は左右半球に分かれており、単語や文の文法などの言語情報を処理する際には脳の左半球優位の反応が現れます。このような脳反応は、幼少期から言語を学ぶという経験によって形成されます。

日本語の多くの方言では“雨”と“飴”の違いをピッチの上昇と下降で区別します。これを単語のピッチアクセントと呼びますが、東北や九州地方の一部にはピッチアクセントを使わない、無アクセント方言と呼ばれる方言があります。過去の研究から母語で単語の意味に関わる音の違いに対して左半球優位を示し、文の抑揚などの違いは、その優位性が現れないことが知られています。しかし、同じ言語内の方言の違いでも同様な変化が見られるのかは分かっていませんでした。

そこで、共同研究グループは、ピッチアクセントを使う標準語の東京方言話者と無アクセント方言を使う東北地方南部方言話者を対象に、異なる方言環境で育った話者間で脳反応の違いがあるかどうかを調べました。

具体的には、ピッチアクセントを聞いた時の東京方言話者と東北地方南部方言話者の脳反応を近赤外分光法<sup>2)</sup>を用いてそれぞれ測定しました。その結果、“雨”と“飴”のようにピッチアクセントで区別される単語を聞き分ける際に、東京方言話者は、左半球優位の反応を示したのに対し、東北地方南部方言話者は左右同程度の反応を示しました。このことから、同じ日本語でも東京方言話者は、ピッチアクセントの違いを単語の違いとして処理しているのに対し、東北地方南部方言話者は抑揚の違いとして処理していると考えられます。

放送メディアなどの影響で、異なる方言環境で育っても特に若い世代では標準語に接する機会も多く、研究に参加した東北地方南部方言話者は標準語と東北地方南部方言のバイリンガルとも言えます。にもかかわらず、東北地方南部方言話者がピッチアクセント処理において東京方言話者とは異なった脳反応を示したことは、言語処理における左半球優位性には自分が育った方言環境が影響することを反映している可能性があります。

この研究は、脳と言語発達の関係の解明に寄与すると考えられます。成果は、米国の科学雑誌『*Brain and Language*』に掲載されるに先立ち、オンライン版（10月18日付け：日本時間10月19日）に掲載されます。